日本女医会誌
復刊第40号

社団法人えの発足に際して

会長　三神美和

天高く馬肥ゆるよい季節となりました。今日此頃の空は私共日本女医会にとって一入澄み渡り、清々しいものに思えます。それは二年越しとなった待望の社団法人許可の朗報が十月十日に届いたからであります。本当にうれしいことであります。会員の皆様と、心からの喜びを共にしたいと思います。

社団法人許可えの道の険しいということは経験者から承わっていましたが本当に大変なことでした。私の会長就任早々からこの仕事にとりかかりました。そして理事の方々は会則改正について度々会合を重ねられ、新らしい会則（定款）を作成されました。しかし厚生省の窓口はなかなかにきびしく、初めはとりつく島もない有様でした。第一に社団法人にしなければならない理由や目的をはっきりさせねばなりませんでした。また日本医師会との関係も明らかにさせねばなりませんでした。二度、三度と説明に行き、交渉を重ね漸く目鼻のつきかけた頃、係官の転任となり、また始めからやり直し、というようなことを繰返し、都庁の法人課に廻ったのが今年の五月、やっと安心したものの、それから内閣官房室に廻って審議をうければならないということでした。そこに廻ってからも二ケ月も経過したのでした。日本医師会長武見先生は厚生省に直接に電話をかけて下され、審査を促進して下さいました。文字通り厚生省へのお百度参りは専ら山崎倫子理事と事務の小川さんがひきうけて下さいました。また内閣官房室へのご助言は山本杉参議院議員をお煩わせしました。このように多くの方々のご協力、ご尽力が実を結び念願の社団法人が実現したのであります。思えばまことに劍しく、長い道でした。この長い道をたゆまず、倦かずにきり開いて下さいました方々に、ここに改めて厚く御礼申上げます。

さていよいよ本会が社団法人となって見ますと、私共はよろこびと共に大きな責任を感じるのであります。会が法人格を持つことによって一人前の団体として社会に認められることになり、会として重みを増すのでありますが、他方にはそれに伴う責任を持たねばなりません。万国博えの役務提供も社団法人日本女医会として参加することが大きな力となるのであります。また寄付に対する免税の申請も出来ることになります。これらの利点をもつと同時に、社会的に役立つ仕事をしてゆく責任を負わねばなりません。定款に定める目的にしたがって医者として、女医として国家福祉の増進に寄与しなければなりません。来年度の万国博えの役務提供は、定款第五条の第三項に掲げられた「医療の普及（医療奉仕を含む）及びこれに対する助成」に該当するものであり、社会的に見て高く評価さるべきものであります。このような目的に叶った事業を今後遂行して行くのには実際どうしたらよいかを会員の皆様と共に考え、社団法人としての義務を果して行きたいと思います。

会員の皆様!!　何卒一人前の団体として踏み出した本会を立派に育てて行くために限りないご協力を切にお願い申し上げます。近頃新会員の加入が目立って多くなりました。これもひとえに会員の皆様のご協力の賜物と存じます。

日本の女医が一本となって医学のため、社会のためにその力を発揮できます日を心から希いつつ社団法人発足への挨拶と致します。

× ×

吉岡弥生賞を受賞して

社会福祉法人　鶴風会
龍　知恵子・藤永　数江・山田都美子
犬飼　美代・中川　冨士・森　寿恵
真鍋　昌子・小俣喜久子・宮坂登志子

一、お礼のことば

日本女医会におかれましては、私共の事業（幼少脳性麻痺児の療育病院ならびに研究所の建設）の社会的活動に対して、昭和四十四年五月十日に吉岡弥生賞を授与されました。

私共一同は本事業をご理解いただけたものと考え、心から感謝いたす次第でございます。しかしながら本事業の建設と運営につきましては、私共は大変微力でありまして、沢山の地域社会の皆様と職員の絶大なるご協力のたまものであることを申しあげます。お蔭様で昭和四十四年四月二十六日に開院以来五年を迎えることができました。

吉岡弥生賞を受賞いたしました光栄をかみしめて、今後、本事業の完成と発展のために一層の努力をする覚悟と賞金の使途ならびに事業の概況を申しあげて、日本女医会に対するお礼の言葉といたします。

二、賞金の使途について

賞金の使途につきましては、理事会において検討の結果、入院児の療育に最も必要な次の品々を購入させていただきました。

品名	単価	数量	金額
(1) 患者運搬車	三七、〇〇〇円	3	一一一、〇〇〇円
(2) 小型ヂャングルヂム	三〇、〇〇〇円	1	三〇、〇〇〇円
(3) ミニットマン人工蘇生器	一七〇、〇〇〇円	1	一七〇、〇〇〇円
合計			三一一、〇〇〇円

各器具には、「日本女医会吉岡弥生賞」と記して、永くそのご好意をつたえ、大切に使用させていただきます。厚くお礼を申し上げます。

三、事業の目的

幼少脳性麻痺児の療育と、その治療法および予防法の確立。

四、設立経過

昭和35年12月　財団法人　鶴風会設立
昭和37年6月　財団法人　鶴風会解散
昭和37年8月　社会福祉法人　鶴風会設立認可
昭和38年3月　東京都北多摩郡村山町

中藤の国有地
一六、五三〇、20㎡
（五、〇〇〇、39坪）
買収（施設建設敷地）
昭和38年4月　東京小児療育病院本館、病棟、職員宿舎の建築工事着工
昭和39年3月　建築中の建物工事完成
昭和39年4月　開院、診療開始、収容定床八八床
医療法による病院開設使用認可、児童福祉法による肢体不自由児施設認可
昭和39年11月　収容定床一〇八床に変更
昭和40年3月　隣接国有地
九、七九七、74㎡
二、九六三、82坪買収
昭和40年10月　脳性麻痺研究所建築工事完成
昭和42年3月　病院、本館、病棟、渡廊下増改築工事完成
昭和42年4月　収容定床一六八床に変更
昭和44年3月　訓練棟建築工事完成

五、規模

(1) 敷地面積　二六、三二七、94㎡（七、九六四、21坪）
(2) 建物面積　延五、四二六、9㎡（一、六四二、45坪）

内訳

本館（鉄筋コンクリート造地上2階、地下1階）
延一、八四九、27㎡（五五九、76坪）
病棟（鉄筋コンクリート造平屋）
延一、三三一、27㎡（四〇二、67坪）
職員宿舎（鉄筋コンクリート造3階）
延一、四九四、30㎡（四五二、53坪）
訓練棟（鉄筋コンクリート造平屋）
延五四七、95㎡（一、六五、74坪）
霊室その他　延二〇四、95㎡（六一、74坪）

六、退院児の動向

昭和三九年四月二六日より昭和四四年三月末日までの五年間の退院児二四七名（総退院児数二七七名、入院中死亡二五名、再入院五名）の疾患別分類と入院時年令および入院期間を表1、表2に示しました。入院期間中、整形外科的手術は、一一一例であります。また平均入院期間は一三、六ケ月であります。

昭和四四年三月三一日現在の退院児二四七名の退院後の動向を書面をもって回答を求めたところ、退院児の退院後の医療面と就学面は次の様です。（回答率七三、七%）

(1) 医療面について。肢体不自由児施設又は重症心身障害児施設等に入院中の者三〇、八%、医療施設等に通院中の者二一、四%、在宅の者四四、〇%、死亡三、八%であり、アテトーゼ型の者に在宅児が多い。

(2) 就学面について。調査対象児の中昭和四四年三月三一日現在学齢前の年齢の者は三七、〇%、学齢以上の年齢の者は六三、〇%、一一〇名でありました。一一〇名中就学及び就学予定者は五九名、三四、三%であり、六五、七%が未就学児である。疾患別、病型別、学校別就学状況を図1に示しました。

表1　退院患者の疾患別分類と入院時年令

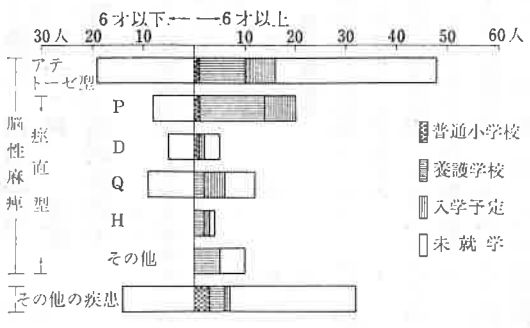
病名 病型別 / 年令別 歳	脳性麻痺 アテトーゼ型	痙直型 P	痙直型 D	痙直型 Q	痙直型 H	その他の型	C.P以外の疾患	計 実数	計 %
1歳未満	1	3		2			6 (3)	12 (3))	4.3
1	17 (6)	4	4	4 (1)	1	1	14 (1)	45 (8)	16.2
2	28 (3)	9	3	6	1	1	14 (1)	61 (4)	22.4
3	28 (5)	7	2	6 (1)		4	10	57 (6)	20.6
4	27 (3)	11	5	4 (1)	1	2	11	61 (3)	22.0
5	6	3		4	2		6 (1)	21 (1)	7.5
6	4			1	1	1	12	19	6.9
計 実	111 (17)	37	14	27 (2)	6	9	73 (6)	277 (25)	
計 %	40.1			30.3		3.2	26.4		100.0

1. （ ）内の数字は入院中に死亡した患者数
2. 混合型は症状の強い方の病型とした。
3. 痙直型の部位分類は患者の機能面を基礎として分類した。
4. 脳性麻痺以外の疾患の主なものは小頭症，精薄，てんかん，髄膜炎後遺症等である。

表2　退院患者の疾患別分類と入院期間

病名 病型別 / 入院期間別 年月	脳性麻痺 アテトーゼ型	痙直型 P	痙直型 D	痙直型 Q	痙直型 H	その他の型	C.P以外の疾患	計 実数	計 %
0～6	45	13	6	13	5	2	43	127	45.8
6～1.0	16	4	1	4		3	10	38	13.6
1.0～1.6	15	3	3	2		1	8	32	11.6
1.6～2.0	12	4	3	3			2	24	8.7
2.0～2.6	5	4		3			2	14	5.1
2.6～3.0	6	6				1	3	16	5.8
3.0～3.6	3		1		1	2	2	9	3.2
3.6～4.0	4	2		2			2	10	3.6
4.0～4.6	4	1					1	6	2.2
4.6～5.0	1							1	0.4
計	111	37	14	24	6	9	73	277	100.0

図1　疾患別，病型別，就学状況



七、脳性麻痺児出生の予防について

第一子に脳性麻痺児を持った母は、三年―五年の間その子供の治療に全力をかけた後、第二子について次の二通りの考えを持つにいたります。

次の子供を希望する理由

(1) 脳性麻痺児のめんどうを親の死後たのむ。

(2) 健康児を得て人並みの家庭を持ちたい。

(3) 自分にも健康児が生めることをたしかめ、自分自身がたちなおりたい。

次の子供を希望しない理由

(1) 再度脳性痺児が生れるのが恐ろしい。

(2) 現在持っている脳性麻痺児に全力をかけたい。

(3) 次の子供の上に第一子の脳性麻痺児の負担をかけたくない。

(4) 経済的にも精神的にも労力の上でも次の子供を持つ余裕がない。

表3　第一子が脳性麻痺児第二子が健康児の場合の妊娠，分娩，新生児期の異常発現率（各30例）

子の状態別	状態別	妊娠中の異常 %	妊娠中の異常 病名	分娩の異常 %	分娩の異常 病名	新生児期の異常 %	新生児期の異常 病名
アテトーゼ型	脳性麻痺	50.0	切迫流産の危険，後期妊娠中毒症，悪阻	84.6	陣痛微弱，早産，早期破水	88.4	重症黄疸
	健康	20.8		20.2		16.7	
痙直型	脳性麻痺	27.8	切迫流産の危険，後期妊娠中毒症	77.8	早産，早期破水，胎位異常	77.8	仮死，未熟児
	健康	5.6		22.2		22.2	

アテトーゼ型、痙直型各々約三〇例について、第一子に脳性麻痺児、第二子に健康児を得た母の妊娠、分娩の状態と、子供の新生児期の状態を比較してみますと表3の様になります。

脳性麻痺児の病理解剖的所見、また成因については日本女医会誌第二五号にのべましたが、成因等についてはまだ多くの不明な点があります。また表3に示した様な妊娠中、分娩時の異常等の母体の環境だけでなく、それをうけとめる胎児の遺伝要因にも問題があるのかもしれません。さらに異常内容は一つ一つが大きな問題でそれ自身の予防法にも未解決の点が多々あると考えられます。しかし同一母体で短期間の間に脳性麻痺児と健康児を生むという事実は、我々医師の努力によってある程度の予防が可能であることを示唆するものでわないでしょうか。また現在までに入院してきた約五〇〇例の脳性麻痺時の妊娠出産経過を検討してみると、一般的な女体、母体の健康管理、分娩新生児期の管理によってだけでも、ある程度の脳性麻痺児の出生を予防できるのでわないかと私共は考えております。

脳性麻痺の治療は相変らず克服訓練が主となっており、障害部位に医学的治療をおこなうことができない現状であります。一人の性脳麻痺児の出現は、国家、社会の損失だけでも我々の考えも及ばぬ程大きなものであります。何卒日本女医会の先生方のご努力により脳性麻痺児の出生を予防していただき度く御願い申し上げます。

八、むすび

私共の事業は、私共が微力のため、開院後五年を経過したにもかかわらず初期の目的を達成し得ず、民間の社会事業としての特性も発揮し得ずにおります。何卒日本女医会の皆様におかれましては今後引続きご支援いただき度くお願い申し上げます。　以上

伊勢　大和

倉　八千代

島かげの濃みどりうつす志摩の海
ほのぼのと白く　朝あけにけり

プールサイドのピーチパラソルあでやかに　若き人々の声のはずみ来

いと細き白き花びら持てる花
南国のはなあわれ浜白綿

明快なプールの海にそそり立つ
安乗灯台に夏の陽強く

美しき線を描きぬ二上山
夕焼雲の背にかかる時

二山の山むらさきに暮るる宵
万葉の皇子の哀しみを想う

ふるさとを思う

福田　幹子（名誉会員）

静かな秋、もの思う秋、こんな時私は、まづふるさとを思います。齢八十路を越えるようになっても、なおふるさとはなつかしく、こいしい。わたしのふるさとは、〝ひろしま〟である。わたしは広島県の北部、島根県境にちかい山村に生れて、明治三十七年三月高等小学校をおえて広島の山中高女の三年生に入学した。

それからの二年間を広島市で暮らした。そのころは丁度日露戦争の最中であった。戦時中の広島は大変であった。出征軍人は必ず一度は広島に集まって広島の港宇品港から出帆した。わが山中高女はその出征軍人の必ず通る道すじにあった、広島城（第五師団）を起点とした道路は大手町一丁目から八丁目まで真直ぐその先きが鷹野橋、その橋を渡れば千田町通り目下の広島大学の通りである。それから御幸通りを御幸橋に到る。それから真すぐに宇品港に入る。このあたり家屋などはなく全くの田園中であった。この通りのなつかしいこと、毎日毎日の出征軍人で、学校生徒は出征軍人送りで多忙、今日は何官様のご出征、今日は何聯隊長のご出征とかで、生徒は見送りに多忙、その他聯隊へアルバイトに行き軍服の肩章など縫附ける仕事の手伝いをした。それでも一応出征が安定したのか出征軍人が通らなくなり大変町がしづかになったと思ったころは、広島市内に七ケ所の傷病兵の入院する予備病院ができ、戦地から帰還する傷病兵は一度は必らず、広島の予備病院へ入院し、それから各々の元隊に送られる。殊に重症で足腰のたたぬ人々は第三分院（これは赤十字本社内）に送られる。

この第三分院は山中高女の隣にあったから、夕方海岸通りへ散歩に行くと宇品の本船から艀にのせられて分院の裏から担架で運ばれる有様を見かけたものだ。夕方の散歩は、とてもうれしかった。土手にはたんぽぽがさいており、道端のれんげも花ざかり、蝶も舞う、その土手の途を三々五々、とりとめもない話に花をさかせて歩いた。これは春の学期末の休みであった。私達中国山系に近い地方からきている者たちは安々と帰郷はできないから寄宿舎に残っていたからである。女学校の向いが広島高師（今の広大）で、とにかくに中国地方における最高学府であった。その高師の学生もよくこの土手を散歩した。「流石に最高学府の学生は何となく気品があるわネ」などと口さがない女学生どもがさわいだものだ。

もう一つの思い出はその頃広島で出逢った大地震である。それはある日の午後突如として来た。生徒は丁度下校

時なので帰った組もあり、まだ授業中の組もあった。受持先生はいろいな処置をなさって、あわてた人、落つき払った人、あとでそれが笑いの種となった。A先生（男・画の先生で高師とかけ持のお方）はすぐ出入口に両手を広げてお立ちになった。ご自分もお動きにならず生徒も一歩も動かさなかった。B先生（女・地理の先生）は授業中の地図を指した鞭を持ったままご自分が真先きに教室を出られたので生徒も我れさきにと階段を下って行った。教員室では何か会議中であったけれど校長先生（七十六歳の老女史）を助ける人もなく、先生は身じろぎもなさらず腰をかけておられた由、お足の工合も悪く歩行さえ充分におできにならない老校長を思う時今でも涙がうかぶ。

校長先生から週一度の和歌の時間があって、ご教示をうけたけれど、何か質問をすると、わざわざ机の処までお運びになって教えて下さった。さればこそ我等橘香会の会員の中には、今でも和歌をよくする人達が多い、これはあの老校長の遺徳である。話の道がそれたけれどその地震の時、私はもう寄宿舎に帰って、お風呂に入っていた。風呂は五右衛門風呂で、湯つぼは三つあった。その時は中の風呂が一番湯加減がよかったので中の湯つぼに入っていた。両側はあつくて入れなかった。地震がゆれはじめたので私は「何事も沈着なるを良とす」などと云っていたところ両側のあつい湯が波のようにくるのでおどろいて急いで着物を着た。そこへ舎監の先生がお顔をお出しになった。風呂の人達が裸ででては困ると思ってネと仰せられた。裸で出て行った人が既に一人いた、それは一年生の小さい子で襦袢一枚で垣根をとび越えたところ垣根の薔薇に下着をとられ、それこそ裸で外に立っていたのを寮の女中さんが見つけて、つれて帰ってくれた。それからが大変でした。

方々の橋が落ちて通学生は帰途になやみ、水が出なくなったので寄宿舎では炊事ができない、百人の寄宿生の飯がたけない。困った末、海水で米をとぎ、井戸のある家から水を貰って来て、やっと夕食ができた。二切れの沢庵とこの海水でといだ米の飯のおいしかったことは忘れられない。クラスメートの話になると数がつきない。私達の組は一年から上って来た人、二年から来た人、三年に編入された人（これが主なもの）他校から転校して来た人々の混成クラスであった。成績は優秀な人が多かった。釜山（朝鮮）から来ていたT子さんは、とても変っていた。国語の時間に指されもしないのに突然立って朗読を初めました「仲秋名月の夜、名将馬にまたがって禁裡を守護す、而して名媛の琴を弾ずるを聞く、何ぞ詩的ならんや」これは小ごうの局の一節です。そうして初任の早稲田文学士の若い先生をとまどいさせました。M子さんは、学校一の美女で才媛でした。多額納税者のお嬢さんで、その容姿はあたりに光りかがやいていました。文章が上手で画もうまし、作文の時「華麗なる春の花、玲瓏なる秋の月」など対句の甘さを見せ級友をおどろかせました。S子さんは年齢が我々より二つ下で何かと幼なくて（体は大きかった）級一番のおてんば娘で常に我々を笑わせました。このごろ東京でクラス会をした時久しぶりに逢ったところ、とても上品な老婦人ぶりで、とてもすましておられるので「往年のおてんばどうしたか。」と申しますと「まあ待て待て今におもむろにだすから」と昔のままの声で相かわらずの性質でした。

クラスメートのだれもかれも老いて背がまがり頭には白髪をいただき、早く現世を去りたいなどと老人めいた口を聞くようになっています。私達皆八十路に入っています。

以上は故郷によせる話であるが、そんな、こんな話ならいくらでも蜘蛛の巣のように出てくる老女のくりごと、誌上の穴うめにもと思ってかきつづりました。

（昭和四四・一〇・二五）

大先輩　志賀みゑ先生

久保田　くら

以前から宇都宮にご開業、ただし現在は一切の仕事から離れ、静かにそしてご多幸に余生をおくっておられる女医の大先輩志賀みゑ先生をご紹介申し上げます。履歴覚書、姓名志賀みゑ、明治十三年十月二十九日生、岩手県胆沢郡金ケ崎町出身。盛岡高女卒、仙台京沢裁縫学校卒業、盛岡医学校に入る、上京、女子医学研究所、東京医学校にて勉学。

前期試験合格、明治四十年頃に実地試験合格、永田町診療所にて臨床経験、陸軍将校家族珍療所に勤務、三十三才にて開業す。

右の履歴をいささか説明いたします。盛岡高女を経て更に和裁を修得、当時の娘さんとしては、この上ない修業を積まれたが兄志賀亘氏（岩手県選出代議士）は両親から医家を志すように要望されながら法律学を好み、妹みゑさんは、兄に代って医学を志し、三田定則先生のはじめられた岩手医大の前身盛岡医学校に通い、三田先生が兄亘氏と親交があったところから、はじめは三田先生のカバン持ちなどを致しつつ医学への第一歩を踏み出す。当時医師を志す者は殆んど医家の書生などをするのが慣わしとされていたときいています。その後兄とともに上京、水道橋にあった女子医学研究所において基礎医学を学ぶ、同時期に友とはかり東京医学校を創立すべく努力、ついに千駄木に東京医学校の設立をみ、開業医の石川忠先生が校長になられ、その後中島先生に校長就任を願う。当時、共に学んだ友人に、吉見さん(信州)、押本ヨウさん、早坂チカ子さん、もうお一人（お名前失念）とがおられた。前期試験を受験すべく勉強中は道すがらに、垣間みた人体模型のそれすら機会を逃がさずに夜分もよくみ、なお解剖などは幸わい機会を得て毎夜通い、熱心のあまり深夜たった一人の場合も怖いとはつゆ思わなかったが一歩その場を辞し、吉祥寺の門通りまでくるその頃こわさが身に必み、走りに走って下宿にかえられた由。やがて東京医学校は済生学舎から男子の学生が勉強に参加するほどにまでなった。

志賀先生が実地試験を合格されたのは、お一人娘の志賀美子さん（明治四十年生）が生まれてからとおっしゃるから前期試験をパスされて暫く時をおいてからかと察しられる。弁護士のご主人が留学中、ロンドンに客死され、美子さんをお一人の手で育てられたのであります。受験期間中、美子さんを背おわれた姉君がみゑさんのために温かい昼食を届けるなど、一方ならぬ周囲の応援を得て四回目についに合格された。

試験場には、先生一人、看護婦二人、受験生一人、合計四人が一室にあり、口答試問に費した時間はおよそ十五分位。解剖などは五分位きかれた。

当時の社会には施療患者が大勢あり、また永田町診療所は施療患者の大

勢集まる形態の診療所であったので選んでここにおもむき、各種の疾患を経験、患者死去の後も住所を前もって調査してあるので病理解剖へのおすすめもできるように心がけ、したがって種々の経験を積むことができた。我々の時代の者もふくめ、いまの医学生には想像もできぬ種々の努力と勉強とをされた。

その後陸軍将校の家族診療所の医師に推薦され、若い私には光栄に思えたと不思議そうにかたられるがご自身のひたむきなご努力のたまものに他ならぬと存ぜられる。

その後裁判官であられた妹さんのご主人が宇都宮におられたお手引きで宇都宮にご開業。開業資金は相当の大額であったが故郷の方がポンと借してくれ、勿論返済。尊敬する亘氏は当時貧乏代議士であったので、物質的にも相当の手伝いをされたとうかがっている。そして岩手県の生家の税金などまでも彼女の肩にかかるところとなった。

お一人お嬢さん、志賀美子さんは、結婚され一児をもうけてから東京女子医専に入学、さらに予科から一年への時女児をもうけ、二児を育てつつ医学生生活をされた。頭脳明晰でみごとに卒業。彼女（美子さん）はご主人の志賀健次郎氏に政界に出る意志あるを知り、心おきなく活躍してもらいたくて医師になられたとか云っていたが、母君みゑさんが政治家の兄亘氏に献身的に尽すのをごらんの上の発意ではなかったかと、私はいまにして思う。ただし美子さんは、在学中から病を得、ギブスをつけての通学、昭和十四年に卒業、後昭和十六年に他界。

近代医学を学ぶ娘の姿に昔をしのびいざ医者になり、ほっとしている間もなく、一人で育てた一人娘の遺児二人を、再び母親となって育てねばならぬ運命がやってきてしまいました。しかしご苦労に立ち向われてもご立派でした。

政治にたづさわる兄上につくされ、息子健次郎氏に憂いなきようにとお孫さんの面倒をみられたことは、志賀家二代にわたる政治家の影武者としての大きな「力」であります。

いろいろのなりわいをご自身の持つ資性をもって処理されたことは勿論でありますが、志賀さんご一家にとって志賀先生が医者であられたからこその幸いもさぞ大きかったかと察しられます。ご自身でつくられた美しいお顔の先生は、そのお話も若々しく、私は年令をかんじさせられた事がない。

お考えは深く、やむを得ざるなりわいさえなかったらどんな社会的活動をされたかと、ひそかに人間的スケールの大きさに敬意を表しております。そして美子さんがよく、母の耳は確かであると診断の確実をほめられた。

今は医業からすっかり引退され、孫の、かう子さんとともに楽しい日々をすごされておられます。かつて美子さんのご主人健次郎氏が防衛庁長官になられご活躍されるのをよろこばれ、今までのご苦労も何もかもつぐなわれて幸わせとお察しいたします。かく影武者的生き方であられたので、日本女医史にみ当らぬことと相成りましたので改めてご紹介申し上げます。大先輩に女医の草分けとしての敬意と讃辞とをおくりご健康をお祈りいたします。

（注）日本女医史を読まれた志賀かう子さんからその感想をうかがい、福田幹子先生のお耳にお入れしたところ、次の版の資料としてよくお話をうかがい、初版にもれたわびを志賀先生に申し上げてほしいとの依頼。元来志賀みゑ先生の姪竹中れい子さん（東女昭和18年卒）は日本女医会の会員、先生の娘美子さんと私とは東京女子医専の昭和十四年卒の同期、志賀ご一家とは永いおつきあいにもかかわらず日本女医史編集に際し資料を提供せぬはうかつこの上なく重ねておわびせねばなりません。この一文私の記載にあやまりあらばご訂正を、不明の点も多く、これもご教示を願いたく、なお志賀先生のような貴重な方々がお申し出がないばかりに女医史にも記載もれが多くあるかと思われるのでご存じの方は本部まで申し出て下さるよう、歴史は正しいほどよきかと思われ敢えて長文の紹介をいたしました。

国際女医会歓迎会

国際連絡書記　佐野アヤ子

第十二回世界放射線医学会が十月六日より十一日まで、ホテル・ニュー・オータニにおいて開催されました。

日本女医会では、会長を始め十四人の会員と、学会に出席された国際女医会会員である台湾のリンさん、ドイツのシュミットさんとギーゼさん、それにオーストラリアのジョーンさんとブランクフィールドさんとを十月八日午後、椿山荘に招き、楽しい一夜を過しました。

於 椿 山 荘（44.10. 8）

折悪しく雨が降り、折角の素晴しい秋の日本庭園をお見せする事ができず残念でした。

しかし一同それぞれの自已紹介に始じまり、和気あいあいのうちにお互いの親密度を深める事ができました。そして来年度、オーストラリアでの国際女医会に、再会する事を約束して散会致しました。

"庶務だより"

▲万国博医療サービスについて。

万国博役務提供百八十三日間中、左記の期間が未だ空欄になっておりますので、地区、クラス単位でのお申し出をお願い申し上げます。

四月　八　日(水)～九日(木)
　　十四　日(火)
五月　六　日(水)
六月　三　日(月)～五日(金)
七月　六　日(月)～七日(火)
　　二十七日(月)～三十一日(金)
八月　十　日(月)～十六日(日)
　　三十一日(月)
九月　五　日(土)～六日(月)

▲年金加入について。

日本女医会年金に加入希望の方、または口数を増加する場合は年二回、十一月、五月に本部までご連絡下さい。

金　額　一口　三千円
口　数　一口より八口まで
送金方法　銀行送金(全国富士銀行、または安田信託銀行)
　　振替送金(半年分を五月、十一月にまとめて送金する)
利　廻　り　年七割七分二厘七毛
年金支給年令　六十五才より実施、

▲十年分会費前納会員名。

渡辺　文子・松尾　昌子・高田　ヨシ
長島　栄子・安藤　稔子・三輪美年子
沢　トシ子・徳永富士子・岸　千津子

▲会員死亡者
心からご冥福お祈り申し上げます。
大西喜代子　佐々木幸江
水吉喜巳　花岡すみれ
伊藤環　沢井寿幾

▲万国博寄付金総額
金三、二三七、二一四円也

昭和44年9月30日現在
寄付申込者名（前号につづく）

◇

▲ルーペンダン
年末年始のご贈答に是非ご使用願います。
定価　二千円　三、〇〇〇円

第十一回国際女医会総会に於て発表された講演の中から（2）

《訳》山崎倫子

Dr. Y. Bergeror-Blondel　パリ・フランス

○人口増加とその抑制

人口増加の問題は世界の飢餓の問題以外の何ものでもない。一七九八年マルサスが世界の人口は毎二五年を周期に倍増することを唱え、出生率を引下げる必要を強調した。その後多くの婦人が産児制限の研究所をヨーロッパ及びアメリカに創立した。人口数と資源の量の差が今日の課題として我々の前にある。二つの世界戦争によって起こった変動を考慮する時、新たな国際的紛争を避ける為には、富める国々はもはや、たとえそれが如何程高価につこうとも、第三の世界をそのままに放っておく訳にはゆかない。

◇

Dr. K. Turpeinen　フインランド

〃フインランド人口及び家族福祉連盟〃は一九五九年以来国際家族計画連盟のメンバーとなっている。事業としては、この分野に働く人達の医業教育を行なっており、又避妊及び経口避妊薬についての精しいデーター等を印刷した小冊子等も発行している。世界でのこの分野に於ける活動状況等、例えば驚異的な世界の人口増加及びその阻止方法等について、月刊ニュース〃国際家族計画連ニュース〃を毎月発行している。それ等は母性健康相談所に無料で配布されている。一般的に言ってフィランドでは未だ一般の婦人の一人一人にまで家族計画や避妊の知識についての指導又は情報の提供を行なっていない。一般知識の基礎となる〃家庭について〃の教育に関しては、まだ学校に於て始められたばかりである。近年やっと、学校に於けるカリキュラムCIVICS（市民の義務についてというような意味）に含まれて教えることが認められた。一九五〇年に人工妊娠中絶法ができて、特定の事態に際して、主として健康上の理由によって妊娠中絶を認めている。目下のところ、産科の診療に関連して、産後の検査の際にどのように避妊指導をしたらよいか等研究中である。そしてその検査の際の避妊指導及び薬剤が国民健康保険で適応されるよう申入れを行なっている。

（つづく）

万博寄付申込者

（敬称略、順不同）

稲生襄
鈴木文子
長田安代
大岡一子
最所福子
長芳枝
浅海敏子
日野千代子
加藤光子
月尾輝子
清水智恵子
島本マサコ
高木由紀江
橋本葉子
小峰仙一
山口知子
田村民子
小野恵
田中博子
高津明実
寺坂小夜子
坪内直子
万有製薬
磯部アイ
渋谷区支部
品川礼枝
保田正子
布浦マツ子
平沢千恵子
関川明子
白津茂子
望月光代
島本道子
高木澄子
平山喜久子
松村義寛
星合之代
工藤智代
石井妙子
菅原幸子
末田鶴子
宮崎朱美
伊藤みさ
下浜紀子
稲川鶴子
岸千鶴子
関田芳枝
永田朝子
太田淑子
佐々木恵子
佐藤京子
星野富美子
矢部ヨシ
木本胤子
三菱銀行三輪支店長
コーワ製薬KK
森寿恵
田中華子
須賀方子
渡辺史
尾形登美子
高田葉子
国東きせ
科研化学K・K
美安静子
大曲治世
旦尾雅子
小林秀子
田所浪子
井関芳子
真中はるゑ
佐藤ちゑ
高間美佐保
飯沼さち子
安田智恵子
坂本イクヨ
小山田利子
伊藤カホ
矢崎光子
長内正子
高田薬品
田村敦子
大谷節子
新井恭子
栃木雪子
水谷達子
高橋弥生
五十嵐和美
山之内製薬
千代田区支部
菅井孝
クラヤ薬局
毛利智恵
篠田陽子
下村サト
岩崎節子
藤森民子
白鳥英子
野見山和子
大西末子
赤垣美代子
城所幸江
村岡美子
狩野登志子
佐々木国子
野村真世子
田中知恵
佐藤香
佐藤キサ
天沼恭子
石川ハルノ
曽山文江
安田宮子
吉武幸
シオノギ製薬KK
朝岡栄子
鍋昌子

編集後記

秋も深くなりました。首相訪米を目前に控え、ヤングパワーはその緊張を一点に集めようとしており、医学界もゆれ動いている中で、日本女医会は社団法人の新たな組織のもとに力づよく再出発しようとしています。会長はじめ多くの方々のねばり強いご努力により、二年という歳月をへて宿願を達成したことはまことによろこばしいことであり、またよろこびに価するものだと思います。本誌も今後はますますみのり豊かなものになってゆくことと思います。

今回の内容もそれぞれ充実したものでございますが、就中、大先輩志賀先生の由緒ある歴史がご紹介されたこと、および同じく大先輩の福田先生が、八十路を越えたご高齢にもかかわらず見事な一文をおよせいただいたことは、私ども後輩会員の大きなはげみになることでございましょう。お二人のますますのご長寿を、編集室の片すみより心からお祈り申し上げつつ筆を擱きます。

（柴田記）

昭和四十四年十一月二十日印刷
昭和四十四年十一月二十五日発行
編集人　森千鶴
発行人　日本女医会
発行所　東京都新宿区市ケ谷河田町19
日本女医会
TEL（341）〇九六八
印刷所　東京都港区白金五-四-一
興栄美術印刷株式会社

題字　吉岡弥生